『サートリス』におけるベイヤードの苦悩

石 川 和 代

Bayard's Torment in *Sartoris*

Kazuyo ISHIKAWA

I

William Faulkner の第3作『サートリス』(*Sartoris*,1929) は，『兵士の報酬』（1926）と『蚊』（1927）を書きながらも，はっきりした主題を持つことのできなかった彼が，しっかりした主題を持った作家としての基盤を築くことになった，重要な作品であり，そのことは，多くの批評家たちによって指摘されている. Faulkner自身, この作品によって, "discovered that my own little postage stamp of native soil was worth writing about and that I would never live long enough to exhaust it"[1] したと述べている. この小説は，彼のヨクナパトーファ物語と呼ばれる連作の出発をなす作品であり，彼の故郷をモデルにしたといわれる，ミシシッピ州ヨクナパトーファ郡という架空の地域を背景として，彼が描いた最初の作品である.

この作品を読んだ誰もが感じることは，なぜ主人公のヤング・ベイヤード (young Bayard, サートリス家には3人の Bayard がおり，そのうち最も若い主人公は young Bayard と呼ばれている）が第1次世界大戦から帰還した後，数々の無謀な行動を重ねたあげくのはてに，実験用の新型の飛行機のテスト飛行を行なって，墜落死するに到らなければならないのかという疑問であり，それが，この作品の中心的なテーマにつながっていると思われる. ヤング・ベイヤードの苦悩について，批評家たちが様々な指摘をしている. たとえば，Irving Howe は，"Bayard's inability to achieve a sustaining relationship with the tradition of his family"[2] であると言い，Edmond L. Volpe は，"an oppressive feeling of guilt for having betrayed his heritage"[3] であると言い，Dorothy Tuck は，ヤング・ベイヤードが "reconcile his tradition with the world in which he lives"[4] できないことであると言って，彼の苦悩を，サートリス家の伝統との関連からとらえている. これに対して，Cleanth Brooks は，"Bayard's trouble is in great part referable not to his family or to his blood but to his experiences as a wartime aviator."[5] と言い，William Van O'Connor は，ヤング・ベイヤードが "seems bent on destroying himself more out of an unmotivated 'lost generation' world-weariness"[6] であると言って，どちらかというと，一般的な意味での戦争体験の方に重点をおいて考えているようである. そこで，ヤング・ベイヤードの苦悩の原因は何であるのかという問題を中心に，この作品を考察してみたいと思う.

II

物語の冒頭の1節では，すでに死んでいるジョン・サートリス (John Sartoris) が，現実の登場人物であるかのように描かれていて，読者に大きな衝撃を与える.

> As usual, old man Falls had brought John Sartoris into the room with him, had walked the three miles in from the county Poor Farm, fetching, like an odor, like the clean dusty smell of his faded overalls, the spirit of the dead man into that room where the dead man's son sat and where the two of them, pauper and banker, would sit for a half an hour in the company of him who had passed beyond death and then returned.[7)]

この1節で読者に衝撃を与えた Faulkner は，すぐそのあとの部分においても，また，ジョン・サートリスがサートリス家に対して持っている支配力の強さを，読者に暗示している．

> Freed as he was of time and flesh, he was a far more palpable presence than either of the two old men... John Sartoris seemed to loom still in the room, above and about his son, with his bearded, hawklike face, so that as old Bayard sat with his crossed feet propped against the corner of the cold hearth, holding the pipe in his hand, it seemed to him that he could hear his father's breathing even, as though that other were so much more palpable than mere transiently articulated clay as to even penetrate into the uttermost citadel of silence in which his son lived.[8)]

すでに死んでいるジョン・サートリスの方が，生きている老ベイヤード(old Bayard)とフォールズ老人(old man Falls)よりも，はるかに手応えのある存在であり，この2人が話をしている部室には，ジョン・サートリスの亡霊が大きく立ちはだかっているような感じである．このような，サートリス家に対するジョン・サートリスの支配力の強さは，のちに，主人公ヤング・ベイヤードの心理に大きな影響を与えることになる．南北戦争で戦死したベイヤード・サートリス(Bayard Sartoris)や，南北戦争後，誰も信じようとしなかった鉄道敷設の夢を，不屈の精神で実現したジョン・サートリスなど，向こう見ずで勇敢だった人々のことを，ジョン・サートリスの妹ミス・ジェニー(Miss Jenny)が昔話として語るが，その昔話は，時がたつにつれてますますゆたかなものになり，さらに，それは歴史的事実をはなれて伝説となり，Olga W. Vickery の言うように，"a precept which both regulates and evaluates behavior"[9)]へと，いつの間にか変わっていく．ミス・ジェニーの語る昔語がだんだんゆたかさを増してゆく様子は，

> ... and as she grew older the tale itself grew richer and richer, taking on a mellow splendor like wine; until what had been a hare-brained prank of two heedless and reckless boys wild with their own youth had become a gallant and finely tragical focal point to which the history of the race had been raised from out the old miasmic swamps of spiritual sloth by two angels valiantly fallen and strayed, altering the course of human events and purging the souls of men.[10)]

という1節に，はっきりと表われている．サートルス家の伝説は，時がたつにつれてゆたかさを増し，事実よりもはるかに勇敢な話になっていったと思われる．

主人公のヤング・ベイヤードは，第1次世界大戦に双子の弟ジョン(John 又は Johnny)と共に参戦したが，ドイツ軍との空中戦で最愛の弟を失い，1人で生まれ故郷に帰還する．彼は復員軍人として堂々と帰還する代わりに，誰にも告げずに，こっそりと我が家に帰ってくる．そして，その直前に，弟ジョンの墓を訪れている．彼は故郷に帰っても落ち着いた生活をすること

ができず，様々な無謀な行動を重ねる．田舎道を走るには強力すぎる自動車で暴走したり，まだ馴らしてない種馬を走りまわそうとしたり，ついには，実験用の新型の飛行機のテスト飛行を引きうけるといった，自殺行為に走ることになるのである．なぜ，彼はこのような行動をとらずにいられなかったか．彼が，ある絶望からのがれるために，様々な自暴自棄な行動に走ったということを暗示する1節がある．

> Then sowing-time was over and it was summer, and he found himself with nothing to do. It was like coming dazed out of sleep, out of the warm, sunny valleys where people lived into a region where cold peaks of savage despair stood bleakly above the lost valleys, among black and savage stars.[11)]

何もすることがなくなると，ヤング・ベイヤードは絶望にさいなまれるというのである．このことに関して，Melvin Backman は，"His need for motion and speed was due not only to the pent up energies of youth, but to a destructive compulsion that derived from an intense yet obscure despair"[12)] と指摘している．

彼の苦悩が始まったのは，双子の弟ジョンが戦死した時であった．ジョンと彼は同じ航空隊に属しており，2人は同じように敵機の来襲に飛びたっていったのであるが，ジョンは，ヤング・ベイヤードの止めるのも聞かずに，多数の敵機の中に飛びこんで行き，遂に撃墜されてしまったのである．"I tried to keep him from going up there on that goddam little popgun"[13)] と言って悔やんでいるように，ヤング・ベイヤードは，最愛の弟ジョンを死なせた責任は自分にあると考え，苦しむ．彼はジョンのことを考えるだけで，息苦しくなる．

> He was thinking of his dead brother; the spirit of their violent complementing days lay like dust everywhere in the room, obliterating that other presence, stopping his breathing, and he went to the window and flung the sash crashing upward and leaned there, gulping air into his lungs like a man who has been submerged and who still cannot believe that he has reached again.[14)]

彼はジョンが死んだのは自分のせいであるという罪の意識に苦しむのであるが，彼の罪の意識を強めるできごとが，後になって起きる．彼は種馬に振り落とされたり，自動車もろとも川に突込み，肋骨を折って，呼吸も困難なくらいの重傷を負ったりするが，なんとか一命をとりとめる．しかし，彼は，体力が回復すると，また新しい自動車を買い，今度は祖父の老ベイヤードを一緒にのせて走る．ところが，ちょうどジョン・サートリスの墓が立っている崖の上の山道をドライブする途中，自動車の震動で心臓の発作を起こした老ベイヤードは，あっけなく死んでしまう．祖父の死は，最愛の弟ジョンの死と重なりあって，彼の罪の意識をいやがうえにも強めることになる．彼は，かってジョンと狐狩りに出かけたことのある．森の中のマッカラム (MacCallum) 家へ，心のやすらぎを求めて出かけて行く．マッカラム家の暖炉の前で，その家の人々と一緒に腰をおろしている彼の心は，罪の意識にさいなまれ，彼は *"You did it! You caused it all; you killed Johnny."*[15)] と，自分自身を責める．また，彼は，マッカラム家に滞在している間，眠ろうとしてもジョンが死んだ時のことを思い出し，その精神的な苦しみのために眠れない夜をすごすのである．

このようにみてみると，たしかに，ヤング・ベイヤードが罪の意識にさいなまれていることは事実である．しかし，ただそれだけでは，彼の苦悩の原因としては十分ではない．ヤング・

ベイヤードに無謀な行動を重ねさせることになった絶望の説明としては，少々不十分なのである．Melvin Backman の "The explanation that Faulkner has offered for Bayard's despair--the feeling of guilt and grief over the death of his twin brother, Johnny—seems neither convincing nor adequate."[16] との指摘は，まとを得ていると思われる．彼の苦悩の原因が単に罪の意識だけでないとしたら，ほかにどのような原因があるのだろうか．Faulkner 自身は，インタビューのときに次のように述べている．

> I expect that that one of the twins really wasn't brave and knew it. His dead brother was the braver, I mean capable of the sort of rash recklessness which passes for physical courage. That the one that survived not only had suffered the psychotic injury of having lost a twin, but also he would have to say to himself, The best one of us died, the brave one died, and he no longer wanted to live, actually. He came back home but he probably had no good reason to live, or maybe he was—would have to salve himself by saying, Well, whether I'm brave or not, it doesn't matter and I don't care.[17]

この作者自身の意見には，物語の内容とそぐわない点が若干あるように思われる．ヤング・ベイヤードは数々の無謀な行動をとりはしたものの，ある時期は落ち着いた生活に戻ったこともあるし，ナーシッサ (Narcissa) と結婚し，新しい生活を始めようという努力もしている．そのことからすれば，彼が全く生きようとする望みを持っていなかったと考えることはできない．おそらく生きようとする気持と，死にたいという気持の両方が，彼の心の中にはあったのであろう．また，これから詳しく述べることであるが，ヤング・ベイヤードは自分が勇敢であろうとなかろうと気にしない，というのは真実ではないと思う．Olga W. Vickery は，"Johnny's death is an even more potent influence on Bayard than his living presence had been. He feels a mixture of violent regret, responsibility, and envy which pervades his every action."[18]と言っているが，ジョンの死がジョンに対する羨望の気持をヤング・ベイヤードにいだかせたという点が，道理にかなっていると思われる．ヤング・ベイヤードには，ジョンが死ぬのをやめさせることができなかったという後悔，すべての責任は自分にあるのだという気持のほかに，勇敢に戦死していったジョンを羨ましくさえ思う気持があったのである．

私は，最初に，サートリス家に対するジョン・サートリスの支配力の強さについてふれたが，死んでもなお子孫たちに大きな影響を与えているジョン・サートリスは，『征服されざる人々』の中でも描かれているように，向こう見ずで，勇敢で，死に方も勇敢であった．また，ジョン・サートリスの兄弟のベイヤード・サートリスも，向こう見ずで，勇敢な戦死をとげたとされている．彼らにまつわる話は，ミス・ジェニーによって昔話として語られるうちに，事実よりも勇敢な話になり，サートリス家の者は勇敢でなければならない，死ぬときも勇敢に死なねばならないという意識を，ヤング・ベイヤードにもうえつけることになったと考えられる．空中戦でジョンが戦死したときの墜落の様子について，ヤング・ベイヤードは次のように語っている．

> Then I saw the fire streaking out along his wing, and he was looking back. He wasn't looking at the Hun at all; he was looking at me. The Hun stopped shooting then, and all of us sort of just sat there for a while. I couldn't tell what John was up to until I saw him swing his feet out. Then he thumbed his nose at

me like he was always doing and flipped his hand at the Hun and kicked his machine out of the way and jumped.[19]

ヤング・ベイヤードは，ジョンの墜落の瞬間を見て，ジョンはサートリス家の者らしく勇敢に死んでいったのだと信ずることになったと思われる．彼はジョンを死なせてしまったことを後悔するだけでなく，ジョンのように勇敢に死ぬことができなかった自分を恥ずかしく思い，自己嫌悪を感じ，ジョンに対して羨望さえも感じ，何とかして自分もジョンのように勇敢になりたい，あるいは，勇敢に死にたいとすら思うのではなかろうか．それは，彼が自動車もろとも川に突込んで重傷を負ったときの，"And this, this wasn't anything: just a few carved slats. Patch up his fuselage with a little piano wire in ten minutes. Not like Johnny."[20]といった，彼とジョンを比較した描写とか，彼がジョンの死についてナーシッサに語って聞かせる話の底流に，"the bitter struggling of his false and stubborn pride"[21] があることも明らかである．

これまで，ヤング・ベイヤードの苦悩について，どちらかといえば，サートリス家の伝統との関連からみてきたわけであるが，ここで，一般的な意味での戦争体験が彼に与えている影響について，少し考えてみたい．少し落ち着きを取り戻した彼は，畑仕事や製粉所の仕事に精を出し，適度に疲労した体で床につくのだが，なぜか目を覚ましてしまう．

But he still waked at times in the peaceful darkness of his room and without previous warning, tense and sweating with old terror. Then, momentarily, the world was laid away and he was a trapped beast in the high blue, mad for life, trapped in the very cunning fabric that had betrayed him who had dared chance too much, and he thought again if, when the bullet found you, you could only crash upward, burst; anything but earth. Not death, no: it was the crash you had to live through so many times before you struck that filled your throat with vomit.[22]

快く疲労した体で床についても，戦争中に死と隣り合わせの体験をした時の恐怖が，意識の奥底からわきあがってきて，彼を目覚めさせてしまうのであろう．また，自動車事故で重傷を負い，ベッドに横たわっているヤング・ベイヤードは，空中戦で今にも死にそうになった時の恐怖を思い出して，体をこわばらせ，悲鳴をあげる．心配したナーシッサが，彼をのぞきこむようにして立っていると，彼は汗の噴き出している額の下から，"wide intent eyes in which terror lurked, and mad, cold fury, and despair"[23] で彼女をまじまじと見つめる．このように，彼の戦争中の恐怖の体験は，彼の苦悩に大きな影響を与えている．また，ヤング・ベイヤードが種馬に振り落とされてけがをした日，彼は警官に保護されてその夜は拘置所にとまるのだが，次の１節は，眠れないまま横たわって夜をすごす彼の気持をよく表わしている．

"Hell," he said, lying on his back, staring out the window where nothing was to be seen, waiting for sleep, not knowing if it would come or not, not caring a particular damn either way. Nothing to be seen, and the long, long span of a man's natural life. Three score and ten years to drag a stubborn body about the world and cozen its insistent demands. Three score and ten, the Bible said. Seventy years. And he was only twenty-six. Not much more than a third through it. Hell.[24]

彼のこの気持は，第1次世界大戦後の厭世観的風潮と大きなつながりがあると思われる．第1次世界大戦中，航空隊の1員として戦った彼にとって，南部の田舎町での人生は，退屈と倦怠以外の何ものでもない。そしてまた，最愛の弟ジョンの死をどうすることもできなかった彼にとって，70年の寿命はあまりにも長すぎると思われたのである

Ⅲ

以上のように考えてみると，ヤング・ベイヤードは，故郷に帰還した後，最愛の弟ジョンを失った悲しみ，ジョンを死なせたことへの自責の念，自分がジョンのように勇敢に死ねなかったことに対する恥ずかしさ，自己嫌悪，ジョンに対する羨望，そしてまた，戦争中に体験した恐怖などの要素が複雑にからみあって生みだす絶望にさいなまれ，それからのがれようとして，数々の無謀な行動を重ねていくのだということがわかる．1度は彼も落ち着きを取り戻してナーシッサと結婚し，彼女との新しい生活をうまくやっていこうとするのだが，結局，絶望からのがれられず，その絶望が，Melvin Backman の指摘の通り，"cuts him off from the light and warmth and pulls him toward death"[25]し，ついに彼は実験用の新型の飛行機のテスト飛行を行ない墜落死する．Olga W. Vickery が "The clash of the legend and the actual experience of war is responsible, in part at least, for Bayard's frustration"[26] と述べているように，ヤング・ベイヤードの苦悩の原因には，サートリス家の伝統に関連したものと，一般的な意味での戦争体験に関連したものの両方があり，どちらであるともいいがたい．しかし，どちらの比重が大きいかを考えるとき，ミス・ジェニーの "Sartoris. It's in the blood. Savages, every one of 'em. No earthly use to anybody"[27] のことばのように，ヤング・ベイヤードの体の中を流れるサートリス家の血が，彼に無謀な行動を重ねさせ，最後には死へとかりたてたのかもしれないと思われてくる．そしてヤング・ベイヤードが死んだ後，ナーシッサがミス・ジェニーと語り合いながらピアノをひいている場面の1節が，作品全体にひびきわたっているように感じられるのである．

> The music went on in the dusk softly; the dusk was peopled with ghosts of glamorous and old disastrous things. And if they were just glamorous enough, there was sure to be a Sartoris in them, and then they were sure to be disastrous. Pawns. But the Player, and the game He plays ... He must have a name for His pawns, though. But perhaps Sartoris is the game itself—a game outmoded and played with pawns shaped too late and to an old dead pattern, and of which the Player Himself is a little wearied. For there is death in the sound of it, and a glamorous fatality, like silver pennons downrushing at sunset, or a dying fall of horns along the road to Roncevaux.[28]

注

1) Meriwether, James B., and Michael Millgate, eds.: *Lion in the Garden. Interviews with William Faulkner,* 255, University of Nebraska Press (1968)
2) Howe, Irving: *William Faulkner: A Critical Study,* 2nd ed., 34, Vintage Books (1962)
3) Volpe, Edmond L.: *A Reader's Guide to William Faulkner,* 72, Farrar, Straus and Giroux (1964)
4) Tuck, Dorothy: *Crowell's Handbook of Faulkner,* 19, Thomas Y. Crowell Company (1964)

5) Brooks, Cleanth: *William Faulkner: The Yoknapatawpha Country,* 103, Yale University Press (1963)
6) O'Connor, William Van: *The Tangled Fire of William Faulkner,* 34, University of Minnesota Press (1954)
7) Faulkner, William: *Sartoris,* 1, Random House (1929)
8) *Ibid.,* 1
9) Vickery, Olga W.: *The Novels of William Faulkner: A Critical Interpretation,* Rev. ed., 19, Louisiana State University Press (1964)
10) Faulkner, 9
11) *Ibid.,* 205
12) Backman, Melvin: *Faulkner: The Major Years: A Critical Study,* 6 ~ 7, Indiana University Press (1966)
13) Faulkner, 43
14) *Ibid.,* 48
15) *Ibid.,* 311
16) Backman, 7
17) Gwynn, Frederick L., and Joseph L. Blotner, eds.: *Faulkner in the University: Class Conferences at the University of Virginia, 1957-1958,* 250, University of Virginia Press (1959)
18) Vickery, 21
19) Faulkner, 252
20) *Ibid.,* 213 ~214
21) *Ibid.,* 251
22) *Ibid.,* 203 ~ 204
23) *Ibid.,* 250
24) *Ibid.,* 160
25) Backman, 9
26) Vickery, 17 ~ 18
27) Faulkner, 298
28) *Ibid.,* 379